

アエロリット

ヴィクトリアマイル 2019

12.3-10.6-10.8-11.1-11.3-11.2-11.5-11.7

前半 3F-後半 3F : 33.7-34.4

前半 5F-後半 5F : 56.1-56.8

当馬上り 3F : 34.8

超高速馬場の東京でのレース。逃げての 1 戦で前半 3F33 秒台でなおかつ 4F 目でも 11.1 秒。そしてラスト 3F 最速というかなりタフな競馬になりました。これを逃げたので相当にきつい展開を自ら作り出しての 5 着。

やや 2 番手も離す縦長の競馬だったので中団以下の馬はおよそ平均ペースをこなした感じでした。ラスト 1F までは踏ん張ったものの最後差された辺りで諦めて 5 着確保の競馬。

上位に来た馬は中団辺りに位置して、東京の長い直線で出し切る競馬に徹した馬達。なおかつ超高速馬場に対応できるだけのトップスピードを持った馬。

端的に言うとバテ差しを決められた形でした。それでも牝馬限定とはいえ G1 メンバー相手にこのペースで逃げてギリギリまで踏ん張ったというのは大きく評価できるかなり強い内容。

因果関係あったかは不明ですがプラスとは言えない全く合わない重馬場のアメリカ遠征帰り 1 戦目だった事もあり、この敗戦は能力の証明でした。

安田記念 2019

12.2-10.9-11.4-11.3-11.2-11.1-11.2-11.6

前半 3F-後半 3F : 34.5-33.9

前半 5F-後半 5F : 57.0-56.4

当馬上り 3F : 33.9

超高速馬場の東京でのレース。ここも逃げを打ったもののスローにコントロールするヴィクトリアマイルとは全く違う内容の逃げ。そこからの早仕掛けでの押し切りはいつも通りの好走パターンに持ち込んでの2着好走。

2,3番手集団はやや離しての逃げで直線に向けて徐々に加速しながら後方馬にコーナーでの加速を要求する競馬で脚を削ぎにいきリードをしっかりと持って直線に進入。

そこからスピードに乗せてリードを広げてそれを残せるかどうかの競馬ですが、それでもスローにまとめた分大きくは落とさなかった。

しかし、直線出し切る競馬に徹したインディチャンプに差されて2着。これはインディチャンプが強かったという内容でアエロリット自身はかなり強い競馬をしたという評価で間違いない。

毎日王冠 2018

12.8 - 11.0 - 11.5 - 12.0 - 11.7 - 11.7 - 10.9 - 11.2 - 11.7

前半 3F-後半 3F : 35.3-33.8

前半 5F-後半 5F : 59.0-57.2

当馬上り 3F : 33.8

超高速馬場開催の秋東京競馬。逃げ切り競馬なのでレースラップ=アエロリットのラップです。前半 5F59 秒ですが高速馬場なので、前後半を素直に比べてスローペースでの 1 戦と言えるでしょう。

逃げて上手くインを立ち回るロスは全くない競馬。これをラスト 3F の直線入り口やや手前からギアを上げて、後続には早仕掛けを誘発。コーナーで早い脚を釣られて出した後続は直線での脚が鈍りました。

ラスト 2F も 11 秒台前半の早いラップで後続に差を詰める事を許さず、高速馬場での押し切りで一躍主役級に躍り出たキセキを完封している点も大きく評価できます。

高速馬場への適正はここで間違いなく見せましたし、ラスト 3F 最速を押し切るロンスパ適正も見せてきました。スローからのロンスパ競馬に対応できるのは高評価。

安田記念 2018

12.2 - 10.8 - 11.2 - 11.3 - 11.3 - 11.4 - 11.4 - 11.7

前半 3F-後半 3F : 34.2-34.5

前半 5F-後半 5F : 56.8-57.1

当馬上り 3F : 34.0

高速馬場東京での 1 戦。前後半の差は小さい平均ペースで 3 番手でインを立ち回ってのロスのない競馬で僅差の 2 着だったレース。

レースラップ自体は減速していく完全に前半特化レース。もちろん前半要素が大きく問われたことは揺るぎませんが、その中でアエロリットが好走できたポイントは、ラスト 2F 地点。

映像を確認すると、ラスト 3F 目は先頭のウインガニオンとの差を僅かに縮めているので、レースラップ 11.4 から考えれば 11.3 あたりでしょう。次に先頭でラスト 1F に突入し、僅差の 2 着まで粘っているのです、これはほぼラップ上は差はなく 11.7 でいいでしょう。

ここから考えれば、当馬の上り 3F34.0。そして確定したのがラスト 3F 目 11.3 とラスト 1F 目 11.7 の二つ。書き換えると $11.3 - ? - 11.7 = 34.0$ となります。つまりラスト 2F 目のラップは 11.0 とわかります。

これは映像で見ても間違いないでしょう。まとめるとアエロリットのラスト 3F は 11.3-11.0-11.7 になり、平均ペースから一脚を使っている事がわかります。

これを使えたかどうか、他の崩れた先行馬たちとの差です。流れたペースからこの加速が繰り出せることこそが前半要素で優位に立てていた(流れたペースでも余力を残せた)という証明です。

このレースからは前半特化レースへの対応力の高さを見せました。東京でペースに乗らずに直線競馬に徹する後半特化の馬にはやられてしまうパターンがここでは嵌ってしまいモズアスコットには敗れましたが、これはコース次第で能力差は認められません。

マイル CS

12.4 - 11.1 - 11.5 - 12.1 - 11.7 - 11.6 - 11.2 - 11.7

前半 3F-後半 3F : 35.0-34.5

前半 5F-後半 5F : 58.8-58.3

当馬上り 3F : 35.0

前後半から見てスローペースになった 1 戦。最初先頭を取るまでに手こずった所が敗因の様に映りますが、4F 目も緩んでいますし、スローペースに落ち着いているので、視覚的には無理に促して逃げた様にも見えますが、これは勘違いでこのロスはそれ程大きくはなかったでしょう。

ただ直線での見せ場がなかったのも事実。これの処理の仕方次第ではスローからの瞬発力戦はこなせないという形で終わります。

この解析については、他のレースとの比較から導き出すので次ページのまとめで記します。

まとめ

まずは、マイルCSの解析を全体から導き出します。スローからの瞬発力戦が無理と言ってしまうのは簡単ですが、それだと毎日王冠の評価と矛盾が生じます。輸送が苦手な可能性も考えられるでしょう。ただ一様に敗戦レースの共通点が輸送だけという訳ではありません。

そこで1つの仮説が立ちます。高速馬場巧者であるという点です。毎日王冠は言わずもがな、安田記念も1分31秒台前半決着。これに比べてマイルCSは1分33秒台決着です。これならば関西遠征のレースも軒並み説明できます。

稍重の桜花賞、重馬場の秋華賞と共にタフな馬場で行われた1戦です。

次に4着だったヴィクトリアマイル2018ですが、こちらはスローペースで、分類するならば後半特化ロンスパレースです。当然稍重馬場ではありますがこなせていい範囲。しかし、この東京での前後半特化の差はあれど、直線ロンスパ競馬で差し込まれているのは安田記念でもしていますし、これは展開とコースに依存した敗戦でしょう。着差も小さいですし、凡走というモノではないです。(メンバーレベルを加味すれば平均ペースの安田記念2着の方がハイパフォーマンスなのは簡単にわかります。)

逆に勝利したレースと言えば、超高速馬場を押し切った毎日王冠、前半特化のクイーンSとNHKマイルCです。馬場こそタフだったものの2着だった中山記念は極端な前半特化レースでした。

まとめると、前半特化レースがベストでこれならば馬場に依存しなくとも好走可能。高速馬場ならば後半特化レースになっても対応できる。凡走パターンは高速馬場ではなく後半特化になった場合となり、アエロリットは前半特化型となります。

コーナリングも上手いので小回りベスト、そして高速馬場ベスト。この2つが噛み合う条件がないのがG1で勝ち切れないところでしょう。阪神京都で結果が奮わないのもこの特性が原因。

ポイント

- ・タフな馬場では注意
- ・勝ち切りには条件必須も対応力は高い